幸田露伴集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和二年十二月一日印刷
昭和二年十二月五日發行

現代日本文學全集　第八篇

著者　幸田露伴

發行者　山本美
東京市麴町區內幸町一丁目三番地

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

發兌　改造社
東京市麴町區內幸町一丁目三番地
幸ビルディング壹階
振替東京八四〇二番
電話銀座一七三三番　四五五八番　五〇四六番

共同印刷株式會社印刷

「幸田露伴集」目次

巻頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）

風流佛……三
風流魔……二六
對髑髏……三八
奇男兒……五一
一刹那……五八
眞美人……六六
辻淨瑠璃……七一
寢耳鐵砲……九二
一口劍……一二七
土偶木偶……一三八
運命……一五九
名和長年……二〇七
蘆の一ふし……二三四
佐渡ケ島……二四三
不安……二五一
太郎坊……二五七
雁坂越……二六三
付焼刃……二七二
術競べ……二八八
五重塔……三〇五
風流微塵藏
さゝ舟……三四三
うすらひ……三五五
つゆくさ……三六七
荷葉盃……三七一
きくの濱松……三八一
ひとり寢……四一七
さんなきぐるま……四三三
あがりがま……四四三
雲の袖……四五三
年譜……四九三

舊文の新刊なるあり感ずるところあり
や四く有るがゆえなるべし
言はんとす
ることろ甚きや四く無きがゆえなるべ
有り然らば則ち試に一句を道へ四く
雲影に隔て島聲に震ふ
琴を抱て遠雲影に立去る
宋は是人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

風流佛

發端　如是我聞

上　一向專念の修業幾年

三尊四天王十二童子十六羅漢さては五百羅漢までを胸中に藏めて鉈小刀に彫り浮べる腕前に、運慶も知らぬ人は讃歎すれども島佛師知る身の心恥かしく、其道に志す事深きにつけておのが業の足らざるを恨み、爰日本美術國に生れながら、今の世に飛驒の工匠なしと云はせん事殘念なり、珠運命の有らん限りは及ばぬ力の及ぶ丈ケを盡してせめては我が好の心に滿足さすべく、且は石膏細工の鼻高き唐人めに下目で見られし鬱憤の幾分を晴らすべしと、可愛や一向專念の誓を嵯峨の釋迦に立し男、齡は何歳ぞ二十一の春。是より風は嵐山の霞をなぐつて腸を斷つ俳諧師が、蝶になれ〳〵と祈る落花のおもしろきを、眺むる事なくて、見ぬ天竺の何の花彫りかけて永き日の入相の鐘に悲しむ程凝り固まつては白雨三條四條の塵埃を洗つて小石の面はまだ乾かぬに、空さりげなく澄める月の影宿す清水に、瓜浸して食ひつゝ齒牙香と詩人の洒落る川原の夕涼み快きをも餘所になし、徒らに垣をからみし夕顔の暮れ殘るを見ながら白檀の切り屑蚊遣りに燒きて、是れも餘德とあり難がるこそをかしけれ。顏の色を林間の紅葉に爭ひて酒に煖めらるゝ風流の仲間にも入らず、硝子越しの雪見に昆布を蒲團にしての湯豆腐を粹がる徒黨にも加はられば、まして島原祇園の艷色には横眼遣ひ一トつせず、おのが手作りの辨天樣に涎流して餘念なく惚れ込み、琴三味線のあちな小歌は聞きもせれど、夢の中にも緊那羅神の聲を耳にするまでの執心あれば、毘首竭摩の魂魄も乘り移らでやあるべき。かくて三年ばかり浮世を驀直に渡り行きければ、勤むるに迫付く惡魔は無き道理、殊さら幼少より備はつての禀賦、雪を圓めて逢摩を作り、大根を斬りて鬱の形を寫しゝにさへ、屢人を驚かせしに、修業の功を積みし上奮發の勇を加へしなれば、冴えし腕は愈々冴え、鋭き刀は愈鋭く、七歳の初發心二十四の曉に成道して、師匠も是までなりと許すに、珠運は忽ち思ひ立ち、獨身者の氣樂さ、親讓りの家財を賣つてのけ　いざや奈良鎌倉日光に昔の工匠の跡訪はんと少し許の道具を肩にし、草鞋の紐の結ひなれで度々解くるを笑はれながら、物のあはれも是よりぞ知る旅。

下　苦勞は知らず勉强の德

汽車もある世に、さりとては修業する身の痛ましや、菅笠は街道の埃に赤うなつて肌着に風呂場の風を避け得ず、春の日永き曝に疲れては蝶うら〳〵と飛ぶに羨ましく、秋の夜は淋しき床に寢覺めて、隣りの鼾ぎしみに魂を驚かす。旅路のなさけなき事、風吹き荒み、熱砂顏にぶつかる時、眼を閉ぢてあゆめば、邪見の喇叭、氣を注ひながら〳〵の馬車に膽ちゞみあがり、雨降り切りては新道のさくれ石足を嚙むに生爪を剝がして惱むを、胴慾の車夫法外の價を貪り、尙も並木で五割酒錢は天下の法だとゆする。仇もなさけも一日限りの、人情は薄き掛け蒲團に襤褸首さむく、待遇は冷やかな平の内に蒟蒻黑し。珠運素より貧しきには馴れても、加茂川の水柔らかなる所に生ひ立ちて、はじめて野越え山越えのつらさを覺えし草枕露に濕りて、

心細き夢おぼつかなくも馴れし都の空を遠るに、無殘や郭公待ちもせぬ耳に眠りを切つて破れ戸の罅隙に、我は額の明星、光りきらめくうら悲しさ。或は柳散り桐落ちて無常身に染みる野寺の鐘、つくづく生命は森を縫ふ稻妻のいと續き難き者と觀ずるに付けても志願を遂ぐる道遠しと、意馬に鞭打ち勵ましつ、漸く東海道の名刹古社に神像木佛梁襴間の彫りまで見巡りて鎌倉東京日光も見たり。是より最後の樂ば奈良ぢやと急ぎ登り行く碓氷峠の冬最中、雪たけありて裙寒き淺間下しの烈しきにめげず臆せず、名に高き和田鹽尻を叢沓の底に踏み蹂り、木曾路に入りて日照山、棧橋寢覺後になし須原の宿に着きにけり。

第一　如是相

書けぬ所が美しさの第一義諦

名物に甘き物ありて、空腹に須原のとろゝ汁殊の外妙なるに、飯幾杯か滑込ませたる身體を此儘寢さするも毒とは思へど爲る事なく、道中日記註け終ひて、のつそつしながら煤びたる行燈の横手の樂書を讀めば山梨縣士族山本勘介大江山退治の際一泊と禿筆の跡、さては英雄殿もひとり旅の退屈に閉口しての御わざくれ、をかしき許りかあはれに覺えて、初對面から膝をくづして語る炬燵に相宿の友もなき珠運、微なる埋火に脚を烘り、つくねんとして櫓の上に首投かけ、うつら〳〵となる所へ此方をさして來る足音、しとやかなるは踵に龜裂きらせしさき程の下女ならず、御免なされと襖越しのやさしき聲に胸ときめき、爲かけた欠伸を半分嚙みて何とも知れぬ返辭をすれば、唐紙すゝ〳〵と開き、丁寧に辭義して、冬の日の木曾路、嘸や御疲に御座りませうが、御覽下され是は當所の名譽花漬、今年の夏のあつさをも越して今降る雪の眞最中、色もあせずに居りまする梅桃櫻のあだくらべ、御意に入りましたら蔭膳を信濃へ向けて人知らぬ寒さを知られし都の御方へ御土產に、と心憎き愛嬌言葉、商賣の艶としてなまめかしく、賣物に香を添ふる口のきゝぶりに利發あらはれ、世馴れて澁らず、さりとて輕佻にもなきとりなし、持ち來りし包、靜かにひらきて、二箱三箱差し出す手つきのしをらしさに、花ば餘所になりてうつゝなく視き込む此方の眼を避けて背向くる顏、折から隙洩る風に燈火動きて明らかには見えざるにさへ隱れ難き美しさ。我折れ深山に是は何物。

第二　如是體

粹の父の子實の母の子

見て面白き世の中に聞て悲き人の上あり。昔は此京にして此妓ありと評判は八坂の塔より高く、其名は音羽の瀧より響きし室香と云へる藝子ありしが、さる程に地主權現の花の色盛者必衰の理をのがれず、梅岡何某と呼ばれし中國浪人のきりゝとして男らしきに契を込め、淺からぬ中となりしより、よその戀をば最屁にする客もなく、よぶ人の絕々になるにつけても、よしやわざくれ身は朝顏の、と短き命捨撥にしてからは恐ろしき者にいふなる新徵組何の怖い事なく、三筋取つても一筋心に君さま大事と、時を憚り世を忍ぶ男を隱匿し半年あまり、苦勞の中にも助くる神の結び玉ひし緣なれや、嬉しき情の胤を宿して帶の祝ひ芽出度悅びしが、舒びし眉間に忽ち皺の涙立ちて、騷がしき鳥羽伏見の戰爭。さても方樣の憎い程の氣强さ、爰なり丈夫の志を遂ぐるはと、一ト群の同志を率ゐて官軍に加はらんとし玉ふを、止むるにあられど生死爭ふ修羅の巷に踏入りて、雲のあなたの吾妻路、空寒き奥州にまで、歸る事は云はずに

旅立ち玉ふ離別には、是ぞ出世の御門出と義理で喩して雄々しき詞を、口に云はする必ず眞情か、狹き女の胸に餘りて案じ過せば潤む眼の、涙が無理かと、粹ほど迷ふ道多くて自分ながらに思ひ分たず。うろ〳〵する内日は立ちて愈々となり、義經袴に男山八幡の守りくけ込んで愚なと笑片頬に叱られし昨日の聲はまだ耳に殘るに、今、今の御姿はもう一里先か、エ、せめては一日路程も見透したきを役立ぬ此眼の腹立しやと、門邊に伸び上りての甲斐なき繰言それも尤なりき。一ト月過ぎ二タ月過ぎても此恨綿綿らう〳〵として、筑紫箏習ふ隣家の妓がうたふ唱歌も我に引き較べて絶ゆる事なく悲しきを、コロリン、チャンと濟して貰ひ度しと無慈悲の借金取めが朝に晩にの掛合、返答さへも力無や、男松を離れし姫蔦の、斯も世の風に靡らるゝ者かと俯きて、横眼に交張りの袋戸に廣重が繪見ながら、悔しいにつけてゆかしさ忍ばれ、早う歸つて下されと獨言口を洩るれば、利足も拂はず歸れとはよく云へた事と吠え付かれ、アア大きな摩して下さるな、あなたにも似合はぬ、と云ひさして、御腹には大事の〳〵我子ではない顔見ぬ先からいとしうてならぬ方樣の記念、唐土には胎教といふ事さへありてゆるがせならぬ者と或夜の物語に聞きしに此ありさまの口惜と腸を斷つ苦しさ。天女も五衰ぞかし、玳瑁の櫛、眞珠の根掛いつか無くなりては華鬘の美しかりける俤とゞまらず、身だしなみも懶くて、光ると云はれし色艶屈託に曇り、好みの衣裳數々彼に取られ是に易へては、着古しの平常衣一つ、何の燒かけの靈香薫ずべき。泣き寄りの親身に一人の弟ば、有つても無きに劣る賭博好き酒好き、おちぶれて相談相手になるべきなられば、賴むは親切な雇婆許り、あぢきなく暮らす中、月滿ちて產聲美しく玉のやうな女の子、辰と名付けられしはあの花漬賣りなりと、是も昔は伊勢參宮の御利益に粹といふ事覺えられしらしき宿屋の親爺が物語に、珠運も木像ならず、涙掃つて其後を問へば、御待なされ、話の調子に乘つて居る内、爐の火が淋しうなりました。

第三　如是性

上　母は嵐に香の迸る梅

山家の御馳走は何處も豆腐湯波干鮭許りなるが、今宵はあなたが態々茶の間に御出掛にて、開化の若い方には珍らしく此兀爺の話を冒頭から潰さずに御聞なさるが快ければ、夜長の折柄お辰の物語を御馳走に饒舌りませう、殘念なは去年ならばもう少し面白くあはれに申し上げて輕薄な京の人イヤ是は失禮、優しい京の御方の涙を木曾に落させよう者を、惜しい事には前齒一本缺けた所から風が洩つて此春以來御文章を讀むも下手になつたと、菩提所の和尙樣に云はれた程なれば、ウガチとかコガシとか申す者は空拔にしてと斷りながら、青内寺煙草二三服馬士張りの煙管にてスパリ〳〵と長閑に吸ひ、無遠慮に榾さしくべて立つ灰の雪袴に落ち來るをぽんと擲きつ、どうも私幼少から讀み本を好きました故か、斯いふ話を致しますと圖に乘つてをかしな調子になるさうで、人我の差別も分り憎くなると孫共に毎度笑はれまするが御聞づらくも癖ならば癖ぞと御免なされ。さてもそののち宝香はお辰を可愛しと思ふより、情には鋭き女の勇氣をふり起して、昔取つたる三味の撥ふたゝび握つても、色里の往來して白痴の大盡、生な通人めらが間の周旋、浮れ車座のまばりをよくする油さし商賣ば嫌なりと、此度は象牙を柊に易へて子供を相手の音曲指南、藝は素より鍛錬を積みたり、身持はみだらならず、且は我子を育てんといふ氣の張あれば、おのづから弟子にも親切あつく、良い御師匠樣と世に

用ゐられて爰に生計の絲道も明き、細いながら炊煙絶えせず安らかに日は送れど、稽古する小娘が調子外れの金切聲、今も昔わー引ヨッとお辰のなき立つ事の屢なるに胸苦しく、苦勞ある身の乳も不足なれば、思ひ切つて近き所へ里子にやり、必死となりて稼ぐありさま、餘所の眼にさへ是を見て感心なと泣きぬ　それにつれなきは方様の、其後何の便もなく、手紙出さうにも當所分らず、まさかに親子笈かけて順禮にも出られれば逢ふ事は夢にばかり、覺めて考ふれば口をきかれなかつたはもしや流彈にでも中られて亡くなられたか、茶絶鹽絶きつとして祈るを御存知ない筈も無からうに、神様も戀しらずならあり難くなし、と愚癡と一緒にこぼるる涙、流れて止らぬ月日をいつも〳〵愛に明かし恨に暮らして我齡の寄るは知られども、早い者お辰はちよろ〳〵歩行。折ふしは里親と共に來てまはらぬ舌に菓子ねだる口元、いとしや方様に生き寫しと抱き寄せて放し難く、遂に三歳の秋より引き取つて膝元に育つれば、少しは紛れて、貧家に溫き日のあたる如く、淋しき中にも貴き笑の唇に動きしが、さりとては此子の愛らしきを見ようとも仕玉はざるか、歸られざるつれなさ、子供心にも親は戀しければこそ、父様御歸りになつた時は斯して爲る者ぞと教へし御辭誼の仕様能く覺えて、起居動作のしとやかさ、能く躾けたと譽めらるゝ日を待て居るに、何處の龍宮へ行かれて乙姫の傍にでも居らるゝ事ぞと、少しは邪推の恪氣萌すも、我を忘れられしより子を忘れられし所にも起る事、正しき女にも切なき情なるに、天道怪しくも是を惠まず。運は賽の眼の出所分らぬ者にて、お辰の叔父、ぶんなげの七と諢名取りし蕩樂者、男は好けれど根性圖太く、誰にも彼にも疎まれて大の字に寢たとて一坪には足らぬ小さき身を、廣き都に置きかれ、漂泊あるきの渡り大工、段々と美濃路を歴て、信濃に來り、折しも須原の長者何がしの隱居所作る手傳ひ、柱を削れ羽目板を付けろと棟梁の差圖には從へど、墨繩の直なには倣はぬ横道、お吉様と呼ばせらるゝ祕藏の孃様にやさしげな濡を仕掛け、鉋屑に墨芯で思を云はせでもしたるか、とう〳〵そゝのかしてとんでもなき穴掘り仕事。それも緣なら是非なしと愛に暗んで男の性質も見分けぬ長者のえせ粹、三國一の狼婿、取つて安堵したと知らぬが佛様に其年なられし跡は、山林家藏緣の下の糠味噌瓶まで讓り受けて、村中寄合ひの席に肩ぎしつかせての正座、片腹痛き世や。あはれ室香はむら雲迷ひ野分吹く頃、少しの風邪に冒されてより枕あがらず、秋の夜冷やかに蟲の音遠ざかり行くも觀念の友となつて獨り寢覺の床淋しく、自ら露霜のやがて消ぬべきを悟り、お辰素性のあらまし顫ふ筆のにじむ墨に覺束なく認めて守り袋に父が書き捨の短册一トひらと共に藏めやりて、明日をもしれぬ我がなき後、賴りなき此子、如何なる境界に落つる共加茂の明神も御憐愍あれ、其人命あらば巡り合せ玉ひて、藝子も女なり、優しき心入れ嬉しかりきと、方様の一言、草葉の蔭に聞せ玉へと、遙拜して閉ぢたる眼を開けば、燈火僅に螢の如く、弱き光りの下に何の夢見て居るか罪のなき寢顔、せめてもう十許りも大きうして銀杏髷を結はしてから死にたしと袖を嚙み忍び泣く時、お辰魘されてアツと聲立て、丑様痛いよ〳〵、私の父様はまだ歸らないかえ、源ちやんが打つから痛いよ、父の無いのは犬の子だつてぶつから痛いよ。オヽ、道理ぢやと抱き寄すれば、其儘すや〳〵と睡るいぢらしさ。アヽ死なれぬ身の疾病、是ほどなさけなき者のあらうか。

下　子は岩蔭に咽ぶ清水よ

格子戸がら〳〵とあけて、締める音は靜な

り。七藏衣裳立派に着飾りて顏付高慢くさく、無沙汰詫びるにもあらで、誇り氣に今の身となりし本末を語り、女房に都見物致させかたく御近付に連れて參つた、と大風なる言葉の尾につきて、下ぐる頭も低くしとやかに、妾めは吉と申す不束な田舍者、仕合せに御緣の端に續がりました上は何卒末長く御眼かけられて御不勝ながら眞實の妹とも思しめされて下さりませと、演ぶる口上に樸直なる山家育ちのたのもしき所見えて室香嬉敷、重き頭をあげてよき程に挨拶すれば、女心の柔なる情ふかく、姉樣の是ほどの御病氣、殊更御幼少のもあるを他人任せにして置きまして、祇園淸水金銀閣見たりとて何の面白かるべき、妾は是より御傍さらず御看病致しましよ、と云へば七藏顏膨らかし、腹の中には餘計なと思ひ乍ら、ならぬとも云ひ難く、それならば家も狹し、おれ丈ケは旅宿に歸るべし、と云つて其晩は夜食の膳の上、一酌の醉に浮かれての漫行き、鼻歌に酒の香を吐き、川風寒き千鳥足、亂れてぽんと町か川端あたりに止まりし事あさまし。室香はお吉に逢ひてより三日目、我子を委ねる處を得て氣も休まり、爰ぞ天の惠み、臨終正念違はず、安らかなる大往生、南無阿彌陀佛は嬌喉に粹の果を送り三重、鳥部野一片の烟となつて御法の風に舞ひ扇、極樂に歌舞の女菩薩一員增したる事疑ひなしと樣子知りたる和尙樣隨喜の涙を落されし。お吉其儘あるべきにあられば雇ひ婆には錢やつて暇取らせ、色々片付くるとて持佛棚の奥に一つの包物あるを、不思議と開き見れば樣々の貨幣合せて百圓足らず、是はと驚きて態々見るに、我身萬一の時お辰引き取つて玉はる方へせめてもの心許りに細き暮らしの中より一錢二錢積み置きて是をまゐらするなりと包み紙に筆の跡、讀みさして身の毛立つ程悲しく、是迄に思ひ込まれし子を育てずに置かるべきかと、遂に五歲のお辰を連れて夫と共に須原に戻りけるが、因果は壺皿の緣のまはり、七藏本性をあらはして不足なき身に長半をあらそへば、段々惡徒の食物となりて痩せる身代の行末を氣遣ひ、女房うるさく異見するに、なんの女の知らぬ事、ぴんからきりまで心得て穴熊毛綱の手品にかゝる我ならねば、負くる許りの者にはあらず、と駈出して三日歸らず、四日歸らず、或は松本善光寺、又は飯田高遠あたりの賭場あるき、負くれば尙も盜賊に追ひ錢の愚を盡し、勝てば飯盛に祝ひ酒のあぶく錢を費す。此癖止めて止まらぬ春駒の足搔早く、坂道を飛び下りるより速やかに、親讓りの山も林もなくなりかゝつて、お吉心配に病死せしより、齡は僅に十の冬、お辰浮世の悲みを知りそめ、叔父の歸らぬを困りて途方に暮れ居たるに、近所の人々、彼奴め長久保のあやしき女の許に居續して妻の最後を餘所に見る事憎しとてお辰をあはれみ助け葬式濟ませけるが、七藏其後愈身持放埒となり、村內の心ある者には爪はじきせらるゝをもかまはず、遂に須原の長者の屋敷も、空しく庭中の石燈籠に美しき苔を添へて人手に渡し、長屋門のうしろに大木の樅の梢吹く風の音ばかり、今の耳にも替らずして、直其傍なる荒屋に住ひぬるが、さても下駄の齒と人の氣風は一度ゆがみて一代なほらぬもの、何一トつ滿足なる者なき中にも酒盃のみ缺けず、柴木へし折つて箸にしながら象牙の骰子に誇るこそ愚なれ。かゝる叔父を持つ身の當惑、御獄の雪の肌淸らかに、石楠の花の顏氣高く生れ付ても、お辰を嫁にせんといふ者、七藏と云ふ名を聞いては、山拔け雪流より恐ろしく、おぞ毛ふるつて思ひ止れば、二十を越して痛ましや生娘。畫は貧仕事に肩の張るか休むる間なく、夜は宿中の旅籠屋廻りて、元は××かも知れぬ客達にまで嬲られながらの花漬賣、歸りは一日の苦勞の塊り、銅貨幾箇を酒に易へて、御

淋しう御座りましたらう、御不自由で御座りましたらうと機嫌取りどり笑顔してまめやかに仕ふるにさへ、時々は無理難題、先度も上田の娼妓になれと七めの云ひ掛りしよし。さりとては胴慾な男め、生餌食ふ鷹さへ暖め鳥は許す者を。

第四　如是因

上　忘られぬのが根本の情

珠運は種々の人のありさま何と悟るべき者とも知らず、世のあはれ今宵覺えて屋の角に鳴る山風の寒さ一段身に染み、胸痛さまでの悲しさ、我事のやうに鼻詰まらせながら亭主に禮云ひておのが部屋に戻れば、忽氣が付くは床の間に二タ箱買つたる花漬、衣脱ぎかけて轉りと横になり、夜着引きかぶればありくと浮ぶお辰の姿首さし出して眼をひらけば花漬、閉づれればおもかげ、是はどうぢやと呆れてまた候眼をあけば花漬、ア、是を見ればこそ浮世話も、思ひの種となつて寢られざれ、明日は馬籠峠越えて中津川迄行かんとするに、能く休までは叶はじと行燈吹き消し意を靜むるに、又しても其美形、エ、馬鹿なと活と見ひらき天井を睨む眼に、此度は花漬無けれど、闇はあやなしあやにくに梅の花の香は箱を洩れてするくと枕に通へば、何となくときめく心を種として咲きも咲きたり、桃の媚櫻の色、さては薄荷菊の花まで今眞盛りなるに、蜜を吸はんと飛び來る蜂の羽音もどこやらに聞ゆる如く、耳さへいらぬ事に迷つては愚なりと、瞼堅く閉ぢ、搔卷頭を蔽ふに、さりとては怪しからず麗しき幻の花輪の中に愛嬌を湛へたるお辰、氣高き許りか後光朦朧とさして白衣の觀音、古人にも是程の彫なしと好な道に恍惚となる時、物の響は冴ゆる冬の夜、臺所に荒れ鼠の騒ぎ。憎し、寢られぬ。

下　思ひやるより增長の愛

裏付股引に足を包みて頭巾深々とかつぎ、然も下には帽子かぶり二重とんびの扣鈕惣掛になし、其上首筋胴の周圍、手拭にて動かぬ樣縛り、鹿の皮の袴に脚絆油斷なく、足袋二枚はきて藁沓の爪先に唐辛子三四本足を燒かぬ爲押し入れ、毛皮の手甲して、若もの時の助けに足橇まで背中に、用意十二分にしてさへ此大吹雪は容易の事にあらず。吼立つる天津風、山々鳴動して、峰の雪、梢の雪、谷の雪、一齊に舞立つ折は一寸先見え難く、瞬間に路を埋め、脛を埋め、鼻の孔まで粉雪吹込んで水に溺れしよりまだまだ苦し。ましてや用意おろかなる都の御客樣なんぞ。命惜くば御逗留なされと朴訥は仁に近き親切。なるほど話聞てさへ恐ろしければ、珠運別段急ぐ旅にもあらず。されば今日丈の厄介になりませう、と尻を炬燵に据ゑて、退屈ね輪に吹く煙草のけぶり、ぼんやりとして其邊見回せば端なく眼につく栢植のさし櫛。扨は花漬賣が心づかず落し行きしかと手に取るとたん、早や其人床しく、昨夕の亭主が物語今更のやうに思ひ出されて、叔父の憎きにつけ世のうらめしきに付け、何となく唯お辰可愛く、おれが神佛なら、七藏頓死させて行方しれぬ親にはめぐりあはせ、宮内省よりは貞順善行の綠綬紅綬紫綬、あり丈の褒章頂かせ、小說家には其あはれおもしろく書かせ、祐信長春等呼び生かして美しさ十分に寫させ、そして日本一大々盡の嫁にして、あの雜綴の木綿着を綾羅錦繡に易へ、油氣少きそゝけ髪に極上々正眞伽羅栴檀の油付させ、握り飯ほどな珊瑚珠に鐵火箸ほどな黃金脚すゞてさゝせてやりたいものを、神通なき身の是非もなし。家財賣つて退けて懷中には猶三百兩餘あれど、是は我身を立る基、道中にも片足滿足な草鞋は捨てぬくらゐ儉約して居るに、絹絞の半掛一トつたりとも空に惠む事難し。さ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

りながらあまりの慕ぼしさ、忘られぬ殊勝さ、かゝる善女に結縁の良き方便もがな、噫思ひ付たりと小行李とく〳〵小刀取出し、小さき砥石に鋒尖鋭く礪ぎ上げ、頓て櫛の棟に何やら一日掛りに彫り付、紙に包んでお辰來らばどの樣な顏するかと待ちかけしは、戀は知らずの粹樣めをかしき所業あてが外れて其晩吹雪尙やまず、女の何としてあるかるべきや。されば流れざるに水の溜まる如く、逢はざるに思ひは積りて愈なつかしく、我は薄暗き部屋の中、煤びたれども天井の下、赤くはなりてもまだ破れぬ疊の上に坐し、去歲の春、すが漏したるか、怪しき汚染は瀧の絲を亂して畫襖の李白の頭に濺げど、たて付よければ身の毛立程の寒さを透間に喞ちもせず、兎も角も安樂にして居るにさへ、うら寂しくて自ら悲を知るに、ふびんや少女の、あばら屋といへば天井も、無かるべく、屋根裏は柴燒く煙りに塗られて怪しげに黑く光り、火口の如き煤は高山の樹にかゝれる猿屋枷のやうにさがりたる下に、あのしなやかなる黑髮引詰に結うて、賜見えたるぼろ疊の上に、香露凝る牛にして壁尙輭らかな纖細な身體を厭ひもせず、なよやかにおとなしく坐りて居る事か、人情なしの七藏め、大方は小鼻怒らし大胡坐かきて爐の傍に、噫、憎さげの顏の見ゆる樣な、盧格子の大どてら着て、十分酒にも暖まりながら、分を知らねばまだ足らず、爐の隅に轉げて居る白鳥德利の寐姿忌々しさうに睨めたる眼ジロリと注ぎ、裁縫に急がしき手を止めさせて無理な吩咐、跡引き上戸の言葉は針、とが〳〵しきに胸を痛めて答ふるお辰は薄着の寒さに慄ふ歟唇、それに用捨もあらき風、邪見に吹く為何防ぐべき骨露れし壁一重、たるみの出來たる錠屏風、あるに甲斐なく世を經れば貧には運も七分凍りて三分の未練を命に生きるか、噫と許りに夢現分たず珠運は歎ずる時、雨戸に雪の音さら〳〵として、火は消えざる炬燵に足の先冷たかりき。

第五　如是作

上　我を忘れて而生其心

よしや背に暖ならずとも旭日きら〳〵とさしのぼりて山々の峰の雪に移りたる景色、眼も眩む許りの美しさ、物腥き西洋の塵も此處迄は飛んで來ず、清淨潔白實に賴母敷岐蘆路、日本國の古風殘りて軒近く鳴く小鳥の聲、是も神代を其儘と、詰らぬ者をも面白く感ずるは、昨宵の嵐去りて跡なく、雲の切れ目の所々、青空見ゆるに人の心の悠々とせし故なるべし。珠運梅干澁茶に夢を拭ひ、朝飯平常より甘く食ひて泥を踏まぬ雪沓輕く、飄々と立出でしが、折角吾志を彫りし櫛與へざるも殘念、家は宿の爺に聞て街道の傍を僅折り曲りたる所と知れば、立ち寄りて窓からでも投込まんと段々行くに、果せる哉樅の木高く聳えて外圍ひ大きく、如何にも須原の長者が昔の住居と思はるゝ立派なる家の、横手に、此頃の風吹き曲めたる荒屋あり。近付くまゝに中の樣子を伺へば、寥然として人のありとも想はれず、是は不思議と、やぶれ戸に耳を付て聞けば、竊々と囁くやうな音、愈あやしく尙耳を澄せば啜り泣する女の聲なり。さては邪見な七藏め、何事したるか、と彼此さがして大きなる節の拔けたる所より覗けば、鬼か、惡魔か、言語道斷、當世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき繩からげ、後の柱のそけ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ。元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髮の恨は長く垂れて顏にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん許り。見るから忽ち肉動き肝躍つて、分別思案もあらばこそ、雨戸蹴開き飛込ん

で、人間の手の四五本なき事もどかしと焦立つまで忙ばしく、手拭ひ棄て、繩を解き懷中より櫛取り出して亂れ髮梳けと渡しながら冷え凍りたる肢體ゐ痛ましく、思はずしかと抱き寄て、嘸や柱に背中がと片手に撫で擦るを、女あきれて兎角の詞ばなく、ヂッと此方の顏を見つめるにきまり惡くなつて一ト足離れ退くとたん、其邊の疊雪だらけにせし我沓にハッと氣が注き、譯も分らず其まゝ外に逃げ出し、三間ばかり夢中に走れば雪に滑りてころ〳〵、あはや膝突かんとしてドッコイ、是は仕たり、蝙蝠傘手荷物忘れたかと跡もどりする時、お辰門口に來り袖を捉へて引くにふり切れず。今更餘計な業仕たりと悔むにもあらず、恐るゝにもあらねど、一生に覺なき異な心持するにうろつきて、土間に落散る木屑なんぞの詰らぬ者に眼を注ぎ、上端に腰かければ、しとやかに下げたる頭よくも擧げ得ず、貴方は龜屋に御出なされた御客樣、わたくしの難儀ゐ見かれて御救ひ下されたは眞にあり難けれど、到底遁れぬ不仕合と身をあきらめては、諦めなかつた先程までの愚が却つて口惜う御座りまする、譯も申さず斯う申しては定めて道理の分らぬ奴めと御さげすみも羞しうござりまするし、御慈悲深ければこそ繩まで解て下さつた方に御禮も能は致さず、無理な願を申すも眞に苦しうは御座りますが、どうぞわたくしめを元の通りお縛りなされて下さりませ、と案の外の言葉に珠運驚き、是は〳〵とんでもなき事、色々入り込んだ譯もあらうがさりとてはつれなき御頼み、縛つた奴を打てとでも云ふのならば痩腕に豆許の力瘤も出しませうが、いとしうていとしうて、一日二晩絶間なく感心しつめて天晴菩薩と信仰して居る御前樣を、縛ることは赤栴檀に飾細工の刀で彫をするよりまだ難し、一昨日の晩忘れて行かれたそれそれその櫛を見ても合點なされ、一體は龜屋の亭主に御前の身の上あらまし聞て、尖禮ながら愍然な事や、私が神か佛ならば、斯もしてあげたい彼もしてやり度と思ひましたが、それも出來ればせめては心許、一日肩ゐ凝らして漸く其彫をしたも、若や御髮にさして下さらば一生に又なき名譽、嬉しい事と、慇々持參して來て見れば、他にならぬ今のありさま、出過ぎたか知りませぬが堪忍がならで繩も手拭も取りましたが、惡いとあらば何とでも謝罪りましよ、元の通りに縛れとはなさけなし、鬼と見て我を御頼みか、金輪奈落其樣な儀は御免蒙る、と心清き男の强く云ふをお辰聞ながら、櫛を手にして見れば、ても美しく彫りに彫りたり、厚は僅に一分餘り、幅は漸く二分許り、長さも左のみならざる棟に、一重の梅や八重櫻、桃はまだしも菊の花、薄荷の花の眼も及ばぬまで細きを浮き彫にして香ふ許り、そも此人は如何なればかゝる細工をする者ぞと思ふに連れて瞳は通ひ、竊に樣子を伺へば、色黑からず、口元ゆるまず、眉濃からずして末秀で、眼に一點の濁りなく、形の外におのづから賤しからぬ樣露はれて、其の親切なる言葉、そもや女子の嬉しからぬ事か。

中　仁はあつき心念口演

身を諦めてはあきらめざりしを口惜とは云はるれど、笑ひ顏してあきらめる者世にあるまじく、大抵は奥齒噛みしめて思ひ切る事ぞかし、到底遁れぬ不仕合と一概に悟られしはあまり浮世を恨みすぎた云ひ分、道理には合つても人情には外れた言葉が、御前のその美しい唇から出るも、思へば苦しい仔細があつてと察しては、御前の心も大分は見えていぢらしく、エ、腹立しい三世相、何の因果を誰が作つて、花に蛛蜘の巢、お前に七藏の緣ぢややらと、天道樣まで憎うてならぬ此珠運、相談の敵手にもなるまいが癪い背中は孫の手に頼めぢや、なよ〳〵とし

た其肢體を縛つてと云ふのでない註文ならば天窓を破つて工夫も仕ようが一體まあどうした譯か、強て聞くでも無けれど此儘別れては何とやら佛作つて魂入れずと云ふ樣なあつけない者話してよき事ならば聞た上でどうなりと有丈の力喜んで盡しませう、と云はれてお辰は、叔父にさへあさましき難題云ひ掛けらるゝ世に赤の他人で是ほどの仁慈。胸に堪へてぞつとする程嬉し悲しく、咽せ返りながら、屹と思ひかへして、段々の御親切、有り難うは御座りまするが妾身の上の話は申し上兼ねまする。申さぬではござりませぬが申されぬつらさを御察し下され。眼上と折り合ねば懲らしめられた許の事、諄々と喧閙の恥を申してあなたの樣な情知りの御方に淺墓な心入と愛想つかさるゝもおそろし。さりとて夢さら御厚意ないがしろにするにはあらず、やさしき御言葉は骨に鏤んで七生忘れませぬ。女子の世に生れし甲斐今日知りて此嬉しさ、果敢なや終り初物、あなたは旅の御客、逢ふも別れも旭日があの木梢離れぬ内。せめては御荷物なりとかつぎて三戸野、馬籠あたり迄御肩を休ませ申したけれどそれも叶はず。斯云ふ中にも叔父樣歸られては面倒、どの樣な事申さるゝかも知れませぬ程にすげなく申すも御身の爲、御迷惑かけては濟みませぬ故どうか御歸りなされて下さりませ、エ、千日も萬日も止めたき願ひはありながら、と跡の一句は口に洩れず、薄紅となつて顏に露るゝ可愛さ。珠運の身になつてどうふりすてらるべき。假令叔父樣が何と云はれうが、下世話にも云ふ乘りかゝつた船、此儘左樣ならと指を銜へて退くは、なんぼ上方產の膽玉なしでも仕憎い事、殊更最前も云うた通りそつこん善女と感じて居る御前の憂目を餘所にするは、一寸の蟲にも五分の意地が承知せぬ。御前の云はぬ譯も後先を考へて大方は分つて居ること、兎も角も私の云事に付たがよい、惡氣でするではなし、私の詞を立て吳れても女のすたるでもあるまい。斯樣しましよ、是からあの正直律義は日つきにも聞ゆる龜屋の亭主に御前を預けて、金も少は入るだらうがそれも私がどうなりとして埒を明けましよ。親類でも無い他人ぐらが要らぬ差出た才覺と思はるゝか知らぬが、妹といふ者持ても見たらば斯も可愛い者であらうかと思ふ程いとしうてならぬ御前が眼に見えた艱難の淵に沈むを見ては居られぬ。何私が善根爲たがる慾ぢやと笑うて氣を大きく持つがよい、さあ御出と、取る手。振り拂はば今川流、握り占なば西洋流か、お辰はどちらにもあらざりし所、無類珍重嬉しかりしと珠運後にて語りし由なるが、それも其時は譃なりしなるべし。

下　弱に施すに能以無畏

コレ吉兵衞、御談義流の御說諭をおれに聞かせるでもなからう、御氣の毒だが道理と命と二つならべてぶんなげの七樣、昔は密男拐帶も仕てのけたが、おとなしくなつて我の姪を、賣るのではない養女だか妾だか知らぬが百兩で緣を切て吳れろといふ人に遣る許の事、其をお辰が間夫でもあるか、小間瘦れて先の知れぬ所へ行ば否だと吼顏かいて逃げても仕さうな樣子だから、買手の所へ行く間一寸縛つて置たのだ、珠運とかいふ二才野郎がどういふ縁きで何の故障だ。七、七。靜にしろ、一體貴樣が分らぬわ、貴樣の姪だが貴樣と遣つて宿中での譽者、妙齡になつても白粉一トつ付けず、盆正月にもあらゝ木の下駄一足新規に買はうでもないあのお辰、叔父なればとて常不斷、能も貴樣の無理を忍んで居る事ぞと、見る人は皆、腐切を貴樣に嚙んで涙をお辰に飜すわ。姑に凍飯食はするやうな冷い心の嫁も、お辰の話聞ては急に角を折つてやさしく夜長の御慰みに玉子湯でもして

上げませうかと老人の機嫌を取る氣になるぞ。それを先度も上田の女衒に渡さうとした人非人め。百兩の金が何で要るか知らぬが、あれ程の善い女を金に易へらるゝ者と思うて居る貴樣の心が鄙しい。珠運といふ御客樣の仁情が半分汲めたならそんな事云はずに有難涙に咽びさうな者。オイ、龜屋の旦那、おれとお吉と婚禮の媒妁役して呉れた恩に着せるか知らぬが、貴樣貴樣は止して下され。七七四十九が六十になつてもあなたの御厄介にならうとは申しませぬ。お辰は私の姪、あなたの娘ではなしさ。きりきり此處へ御出しなされ。七が眼尻の上らぬうち素直になされた方が御爲かと存じます。それともあなたは珠運とかいふ奴に賴まれて口をきく許りぢや、おれは當人ぢや無ければ取計ひ兼ると仰やるならば其男に逢ひましよ。オ、其男御眼にかゝらうと珠運立出で、つくづくと見れば、鼻筋通りて眼つきりゝしく、腮張りて一癖確にある惡者。膝すり寄せて肩を怒らせ、珠運とか云ふ小二才はおのれだな。生弱々しい顏をして能もお辰をかどわかした、若いのには似ぬ感心な腕。併し若いの、鬪鷄の前では地鷄はひるむわ。身の分限を知たなら尻尾をさげて四の五のなしにお辰を渡して降參しろ。四の五のなしとは結構な仰せ、私も手短く申しませうなら、お辰樣を賣らせたくなければ御相談。ふざけた囈語は置てくれ。コレ七、靜に聞け、どうか賣らずと濟む工夫を、と云ふをも待たず。全體小癪な旅烏と振りあぐる拳。アレと走り出るお辰、吉兵衞も共に止めながら、七藏、七藏、扨も其方は智慧の無い男、無理に賣らずとも相談のつきさうな者を。フ、相談付かぬは知れた事、百兩出すなら呉れてもやらうが、とお辰を捉へ立上る裙を抑へ、吉兵衞の云ふ事をまあ下に居てよく聞け、人の身を賣買するといふは今日の理に外れた事、娼妓にするか妾に出すか知らぬが。エ、喧擾しいわ老耄、何にして食はうがおれの勝手、殊更内金二十兩まで取つて使つて仕舞つた、變改はとても出來ぬ、大きに御世話、御茶でもあがれ。とあくまで罵り、小兎攫む鷲の眼さし恐ろしく、龜屋の亭主も是までと口を噤むありさま、珠運口惜く、見ればお辰はよりどころなき朝顏の嵐に逢ひて露脆く、此方に向ひて言葉はなく深く禮して叔父に付添立出る二タ足、三足め、又後ふり向きし其あはれさ。八幡命かけて堪忍ならずと珠運七を呼留め、百兩物の見事に投出して、亭主お辰の驚くに關はず、手續油斷なく此惡人と善女の緣を切りてめでたしめでたし、まづは龜屋の養女分となしぬ。

第六　如是緣

上　種子一粒が雨露に養はる

自分妾狂しながら息子の傾城買ひ責むる人心、あさましき中にも道理ありて、七の所業誰憎まぬ者なければ、酒呑で居ても彼奴娘の血を吮うて居るわと蔭言され、流石の奸物も此處面白からず、荒屋一トつ遺して米鹽買懸りの云譯を家主龜屋に迷惑がらせ、何處ともなく去りける。珠運も思ひ掛なく色々の始末に七日餘り逗留して、馴染につけ亭主賴もしく、お辰可愛く、圍爐裏の傍に極樂國、迦陵嚬伽の笑聲睦じければ客あしらひされざるも却て氣樂に、鯛は無くとも玉味噌の豆腐汁、心協ふ同志安らかに圓坐して食ふ甘さ、或は山茶も一時の出花に、長き夜の徒然を慰めて圍ひ栗の、皮剝てやる一顆のなさけ、嬉氣に賞翫しながら彼も剝きたるを我に呉るゝをかしさ、實に山里も人情の暖さありてこそ住ば都に劣らざれ。さりながら指折り數ふれば最早幾日か過ぬ、奈良といふ事憶ひ起しては空しく遊び居るべきにあらずと、ある日支度整へ勘定促し立出んといふに亭主呆

れて、是は是は、婚禮も濟まぬに。ハテ誰が婚禮。知れた事お辰が。誰と。冗談は置玉へ貴郎ならで誰とと云れてカッと赤面し、乾きたる舌早く。御亭主こそ冗談は置玉へ、私約束したる覺なし。イヤ怪しからぬ、野暮を云はるゝ。都の御方にも似ぬ、今時の若者がそれではならぬ、さりとては百兩投出て七藏にグッとも云はせなかつた捌き方と違つておぼこな事、それは誰しも羞かしければ其樣にまぎらす者なれど、何も紛らすに及ばず、爺が身に覺あつてチャンと心得てあなたの思はく圖星の外れぬ樣致せばおとなしく御待なされ、と何やら獨呑込の樣子、合點なられば。是御亭主、勘違ひ致さるゝな、お辰樣をいとしとこそ思ひたれ、女房に爲ようなぞとは一厘も思はず、忍びかれて難義を助けたる許の事、旅の者に女房授けられては甚だ迷惑。ハヽ、ハア、何の迷惑、器量美しく、學問音曲のたしなみは無くとも縫針喧からず、女の道自然と辨へておとなしく、殿御を大事にする事請合のお辰を迷惑とは、兩柱の御神以來圖ない議論、それは表面、眞を云へば御前の所行も曰くあつてと察したは年の功、チョン髷を付けて居ても粹ぢや、實はおれもお前のお辰に惚れたも善く惚れた、お辰が御前に惚れたも善く惚れたと當世の惚れ樣の上手なに感心して、媼とも相談して支度出來次第婚禮さする積ぢや。是珠運年寄の云ふ事と牛の鞦外れさうで外れぬ者ぢや。お辰を女房にもつてから奈良へでも京へでも連れ立て行きやれ。おれも昔は脇差に好みをして、媼も鏡を懷中してあるいた頃、一世一代の贅澤に義仲寺をかけて六條樣參り一緒にしたが、旅ほど暢が可愛うておもしろい事はないぞ。いまだに其頃を夢に見て後での話に、此間も媼に眞夜中頃入商を飛出させて笑つたぞ。コレ珠運、ホイ是は仕たり。孫でも無かつたに。と罪のなき笑ひ顏して綺麗なる天窓つるりとなでし。

中　實生二葉は土塊を抽く

我今まで戀と云ふ事爲たる覺なし。勢州四日市にて見たる美人三日眼前にちらつきたるが其は額に黑痣ありてそのところに白毫を付けなばと考へし也。東京天王寺にて菊の花片手に墓參りせし艶女、一週間思ひ詰めしが是も其指つきを吉祥莫持せ玉ふ鬼子母神に寫してはと工夫せし也。お辰を愛でしは修業の足しにとにはあらざれど、之を妻に妾に情婦になどせんと思ひしにはあらず、强ひて云はゞ唯何となく愛でし勢に乘りて百兩は與へし耳、潔白の我心中を忖る事出來ぬ爺めが要らざる粹立馬鹿々々し、一生に一つ珠運が作意の新佛體を刻まんとする程の願望ある身の、何として今から妻など持つべき、殊にお辰は叔父さへなくば大盡にも望まれて有福に世を送るべし。人は人、我は我の思はくあり。と決定し、置手紙にお辰宛て少許の恩を枷に御身を娶らんなどする賤しき心は露持たぬ由を認め、跡は野となれ山路にかゝりてテクテク歩行。さても變物、此男木作りかと譏る者は肉團奴才、御釋迦樣が女房捨て山籠せしは、者婆も匕を投げた癩病、接吻の唇ポロリと落ちしに愛想盡かしてならんなど疑ふ輩なるべく、尊し、尊し、銀の猫捨てた所が西行なりと喜んで譽むる輩、是も却つて雪のふる日の寒いのに氣が付かぬ詮義ならん。人間元より變な者、日盲ひてから其昔拜んだ旭の美しきを悟り、巴里に住んでから澤庵の味を知るよし。珠運は立鳥の跡ふりむかず、一里あるいた頃不圖思ひ出し、二里あるいた頃珠運樣と呼ぶ聲、まさしく其人と後見れば何もなし。三里あるいた頃、もしえと袂取る樣子、慌にお辰と見れば又人も居らず、四里あるき、五里六里行き、段々と遠くなるに連れて迷ふ事多く、遂には其額見たくなりて寧

歸らうかと一ト足後へ、ドツコイと一二町進む内、むら〳〵と其聲聞き度なつて身體の向を思はずくるりと易へる端途、道傍の石地藏を見て、奈良よ〳〵、誤つたりと一町たらずあるく向より來る夫婦連の、何事か面白相に語らひ行くに、我もお辰と話仕度なつて心なく一間許り戻りしを、愚なりと悟つて半町歩めば、我しらず迷に三間もどり、十足あるけば四足戻りて、果は片足進みて片足戻る程のたわしさ。自分ながら譯も分らず、名物栗の强飯賣家の牀儿に腰打掛けてまづ〳〵と案じ始めけるが、箒木は山の中にも胸の中にも、有無分明に定まらず、此處は言文一致家に賴みたし。

下　若木三寸で蝶蝶に害ふ

世の中に病てふ者なかりせば男心のやさしかるまじ。毫先のはれあがりたる當世才子、高慢の鼻を、つまみ眼鏡ゆゝしく、父母干渉の弊害を說きまくりて御異見の口に封蠟付玉ひしを、一目粗造のブランデイに腸加答兒起して閉口頓首の折柄、古風の思付、氣に入らぬか知らぬが片栗湯拵へた、食べて見る氣はないかとの御介抱有難く、へこたれたる腹に母の愛情を呑んで知り、是より三十錢の安西洋料理食ふ時もケーク丈はボツケツトに入れて土產となす樣にもなる者ぞ、ゆめ〳〵、美妙なる天の配劑に不足云ふべからず、と或人仰せられしは尤なりけり。殊運馬籠に塞あたりして熱となり、旅路の心細く二日許り苦む所へ、吉兵衞とお辰尋ね來り、樣々の骨折り、病のよき汐を見計らひて駕籠安泰に龜屋へ引取り、夜の間も寢ずに美人の看病、藪醫者の藥も瑠璃光藥師より尊き善女の手に持たせ玉へる茶碗にて呑まされば何利かざるべき、追々快方に赴き、初めてお辰は我身の爲にあらゆる神々に色々の禁物までして平癒せしめ玉へと禱りし事まで知りて涙湧く程嬉しく、一ト月あまりに衰へこそしたれ、床を離れて其祝義濟みし後、珠運思ひ切つてお辰の手を取り一間の中に入り、何事をか長らく語らひけん、出る時女の耳の根紅かりし。其翌日男眞面目に媒妁を頼めば、吉兵衞笑つて、牛の鞦と老人の云ふ事、どうぢや〳〵、と云ひさして、元より其支度大方は出來たり、善は急いで今宵にすべし、不思議の因緣でおれの養女分にして嫁入らすればおれも一ト つの善い功德をする事ぞ、とホク〳〵喜び、忽ち下女下男に、ソレ膳を出せ、椀を出せ、アノ銚子を出せ、なんだ貴樣は蝶の折り樣を知らぬかと甥子まで叱り飛して騷ぐは田舍氣質の義に進む所なりかゝる中へ一人の男來りてお辰樣にと手紙を渡すを、見ると齊しくお辰忙たゞしく其男に連立ちて一寸と出でしが其儘戻らず、晩方になりて時刻も來るに吉兵衞焦つて八方を駈廻り探索すれば、同業の方に宿り居し若き男と共に立去りしよし。牛の鞦爰に外れてモウともギウとも云ふべき言葉なく、何と珠運に云ひ譯せん。さりとて淫猥なる行はお辰に限りて無かりし者をと蜘手に思ひ屈する時、先程の男來りて再渡す包物、ひらきて見れば、一筆啓上、仕候未だ御意を得ず候へ共お辰樣身の上につき御厚情相掛られし事承り及びあり難く奉存候さて今日貴殿御計にてお辰樣婚姻取結ばせられ候由驚入申候仔細之あり御辰樣儀婚姻には私方故障御座候故從來の御禮旁罷り出で相止申べくとも存候へ共如何にも場合切迫致し居り且はお辰樣心底によりては私一存にも參り兼候樣の儀に至り候ては迷惑に付甚だ唐突不敬なれども實はお辰樣を賺し申し此婚姻相延申候やう決行致し候尙又近日參上仕り入り込たる御話し委細申上べき心得に候へ共差當り先日七藏に渡され候金壹百圓及び御禮の印までに金百圓進上し置き候間御受納下され度候

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com